

多世代交流の

プロジェクトの
エッセンス

多世代交流による足利のまちづくり

02

自分たちの足利を
自分でつくる

舞台と学校
による映画足利

楽しいことを
生み出す

多世代交流による足利のまちづくり

アート活用した
アート地域資源

近代化遺産の保存と
活用による
未来空間を
考える

多世代交流の場
を作る

あしり
隊

足利のまちづくり



はじめに

末武義崇

(足利大学・足利短期大学学長)

表紙デザインについて
活動は人の輪です。足利でのさまざまな活動、つまり人の輪の大きさはそれぞれ違って、目的、特徴、関係性もバラバラです。そんな人の輪ひとつひとつが本冊子では紹介されています。さまざまな星が繋がって星座を描くように、人の輪が多様に繋がって、新しい活動が芽生えることを願って、このデザインとしました。

『多世代交流による足利のまちづくり』が創刊されて、今年で2年目を迎えました。創刊号の表紙のデザインを見ますと、幾つかの輪が描かれていて、それぞれの輪が足利のまちづくりに関わる個々の活動に対応しているようです。デザインの説明によりますと、「足利でのさまざまな活動の輪、人の輪が、多様に繋がって、新しい活動が芽生えることを願ったデザインである」といった説明がなされており、企画・編集委員会の皆さんの高い志を感じさせる、夢のあるデザインだと思えます。こうした、意欲的な冊子の巻頭言の執筆者として選ばれたことは大変名誉なことであり、企画・編集委員会の皆さまに感謝申し上げる次第です。

私は、令和4年4月から足利大学・足利短期大学の学長を拝命し、甚だ微力ではありますが、大学・短大の発展に寄与すべく日々努力を重ねております。本学は、自然エネルギーや再生可能エネルギーを活用したSDGsへの貢献、海外の姉妹校・提携校との関係を核とした国際交流活動の促進、栃木県や足利市への地域貢献・地域協働を、

高等教育機関としての活動の柱としております。三つ目の柱が、正しく「多世代交流による足利のまちづくり」に繋がるもので、本誌において紹介されている全ての話題が、本学にとって注目すべき活動です。中には本学の関係者が直接関わっている活動も含まれております。

最初にインタビュー記事が掲載されている本学OB秋草俊二さんは、学校法人足利大学理事を務めておられ、日頃から私も色々ご指導いただいております。「足利では、県内の他大学の活動もある。地域の大学という利点を生かして、他大学と協力体制をとりながら、足利大学にもっと前面に出て欲しい。」と言う趣旨の叱咤激励の御言葉には、学長として思わず背筋が伸びる思いがいたしました。

足利近代化遺産の保存と活用に関する話題も、本学のOB教員、福島二朗先生が深く関わっておられる活動です。本文中でも紹介されていますように、平成29年の設立記念シンポジウムを皮切りに、これまで5回の講演会・シンポジウムが開催されています。私もほぼ毎回参加させていただき、

01 はじめに

末武義崇 氏（足利大学・足利短期大学学長）

03 目次

04 座談会 | この人に聞く

秋草俊二 氏（株式会社トチセン代表取締役社長、足利大学理事）

08 地域資源を活用したアートによるまちづくり 廃校×アート

秋山佳奈子 氏

12 高校生が足利を盛り上げたい

あしかが高校生クラブ あしもり隊

16 近代化遺産の保存と活用による豊かな未来空間を考える

岩本秀雄 氏

22 ジモトの木プロジェクト

清水(和木) 佐恵子 氏

26 自分たちの足利を自分たちの手でつくる

鈴木光尚 氏

30 表現教育を軸に、多世代交流の場を作る

成澤布美子 氏

34 楽しいことを共有して、つながりを生む

梁川健人 氏

38 足利を舞台とした高校生による映画

Bad Guys ART work

40 おわりに

渡邊美樹 氏（足利大学教授）

ここ数年は、足利大学を代表して僭越ながら開会の辞を述べさせていただいております。「足利の近代化遺産を考える会」の地道な活動が評価され、令和4年度には、初代会長の中村恵三本学名誉教授に足利市民文化賞が授与されました。

当然のことではありますが、足利のまちづくりには学校法人足利大学以外にも、多くの方々関わっておられ、足利の活性化に寄与されております。本誌でもそうした多くの活動が紹介されていますが、地元の足利大学に20年以上勤務しながら、大学関係者以外の諸活動についてはほとんど存じ上げず、自らの不明を恥じているところで。今回本誌で紹介されている活動に限定しても、地域資源を活用してアート作品を生み出しておられる方、地元の木材を使って実用的な家具を製作されている方々、ご自身の表現活動を子供たちの教育の場で実践されている方や、ボランティアやNPOの自立と成長を支援しておられる方々、地域の若者で協力して地域をつなぐ活動を展開しておられる方がおられることを知りました。何と言っても、市内の高校生がイベント開催への協力など様々なプロジェクトを通じて、あるいは足利を舞台とした映画

製作を通じて、足利の活性化に努力している姿には、その活力と積極性に驚きと共に感銘を覚えました。足利の若者は中々やるな！と、大いに頼もしく感じました。

創刊号も含め、本誌を通じて足利における様々な活動を知ることが出来ます。表紙デザインの解説にもあるように、一つ一つの活動は人の輪で成り立っていて、輪の大きさもそれぞれ違います。個々の輪の目的、特徴、関係性もバラバラですが、人々の活動の輪が繋がって新たな活動を創造しようとする本誌の意図には、私も大いに共感を覚えております。

我が学園、学校法人足利大学の建学の精神は、聖徳太子の十七条憲法の第一条、「和を以て貴しとなす」です。輪“と”和“。漢字は違いますが、読みは同じです。さらに言えば、その意味するところには、大いに相通するものがあります。我が足利大学の“和の精神”が、『多世代交流による足利のまちづくり』の輪に繋がっていくことを心より祈念し、巻頭のご挨拶といたします。

令和5年4月17日

足利大学・足利短期大学 学長 末武義崇



左から福島二郎氏、大野隆司氏、秋草俊二氏、渡邊美樹氏、北村隆氏
株式会社トチセン ランカシャボイラー前での記念撮影

この人に聞く

秋草俊二 氏

(株式会社トチセン代表取締役社長、足利大学理事)

座談会

聞き手：大野隆司、北村隆、福島二郎、渡邊美樹

2023年2月1日 13時30分から

場所：株式会社トチセン会議室

※発言については、秋草俊二氏は「秋草」、渡邊美樹氏は「渡邊」、福島二郎氏は「福島」、大野隆司氏は「大野」と表記した。

渡邊—この活動は牛山泉先生（足利大学前理事長）からお声がけをいただいたのはじまりでした。活動を進めていくと、足利ではすでにいろいろな活動をされている団体はあるけれど、横のつながりがないように思えましたし、世代間でもつながりが少ないようにもみえました。

コロナ禍ということもあって集まるのが難しい。そこで、世代ごとに顕著な活動をされている方々から取材して、それを冊子にまとめていくことになりました。今回のインタビューは株式会社トチセンの秋草社長にお願いすることにしました。歴史あるトチセンの社長だけでなく、足利大学の理事、そして市内外問わずさまざまな団体で要職についていらっしゃる立場から、ご意見を伺いたいと思います。

歴史的な建物とまち ～個人のものではない、公共のものであるという意識

福島—トチセンの歴史的な工場群はまちにとつて欠くことのできない必要なものですね。足利のかつての織物産業を代表する建物として、現在残っているのが唯一だろうと思います。こういったものをなぜ残している。私は建築関係には関わらなかったけれど、たまたまいろんな人につながっています。逆にそれを生かしてこの建物を維持してきました。本当にこの建物のためにいろんな人が応援してくれました。だからそういう繋がりを、これまで大事にしてきました。

次世代にどうつなぐか ～古いとみるか、文化的とみるか

福島—これからもそういう思いの中でこの歴史的な建造物を使っていくわけですね。**秋草**—今後、この建物をどうするかという時がくるかもしれません。美観も含めて相当な費用をかけて何を守るのか、そこが問題になります。やはり、我々はメーカーです。製造業を生業としていたのであって、建屋が金を生むわけではないのです。

私もだんだん歳をとって行く。もう次世代に事業承継をしていかなくちやならない。では、次の人はそういうことをしてくれるかどうか。それは次の人のもとに集まったメンバーが考えることであって、それを確約はできません。

ただ、我々の背中を見ているから、そういうことは意識していると思うけれど、やっぱり世代が違いますしね。近代化され

いくのか、残す必要があるのか、さらに、これをどのような形で残しながら扱っていくか、こう思っているのか、その辺のところをお話していただければいいかな。

秋草—私はこの足利で生まれ、足利で育ちました。そして、こういう歴史ある会社を、経営者としてやらせていただいています。私はそれが使命だと思っています。これまで何があっても、この建物が維持されてきて、残っているわけですね。これは残していかなくてはいけないと考えているからこそ、今やっているわけです。だから、その思いですよね。これはあくまでも個人のものではない、公共のものであるという意識が常にあります。だから、トチセンに関わるすべての人たちの財産だと思っていますし、この地域における大事な歴史遺産だということのような意識を持っています。

私が常々思っているのは、いい加減な経営はできないということです。というのは、残すためには今やっている事業がうまくいかなければ残せませんね。だから、ある程度それを維持できるための体力（資金）が必要です。

壊すのは意外と簡単。もう本当に簡単だと思います。それはある程度費用がかかるかもしれませんが、維持する方が全然難しい時代は生きていく子どもたちが、本当にこの古いものをどう思うか。だからこそ、我々はこれが非常に貴重なものだというお墨つきは欲しいと思っています。いわゆる、目に見える価値を分ける形にしておく、それが必要だと思っています。

福島—そう思いますね。こういった歴史的な建物の価値や会社独自の取り組みを、どのようにまわりに知ってもらおうかというのは重要だと思いますね。

秋草—地域の人たちにしても会社の前を通っただけで、工場も何も見たことはないだろうし、価値もわかっていないのが非常に寂しいことだなと思っています。今度たまたま足利市立御厨小学校の教職員のみなさんが工場を見学に来るけれども、先生方は「ここにこういう歴史的な建物があるよ」と小学校の3年生に教えていくとのことですね。まず、教える人が学ぶ訳です。

たとえば、この地域には八木宿があります。江戸時代に例幣使街道にあった旧八木宿でおこなわれた盆踊りが八木節です。この八木宿は日本三大民謡の一つの八木節発祥の地です。ここが本当の発祥の地であり、その目の前に東武福居駅があって、このトチセンがある。ここには歴史的なパターソンがあって、日本のいわゆる繊維の

所在地
〒326-0338
栃木県足利市福居町 1143
株式会社トチセン

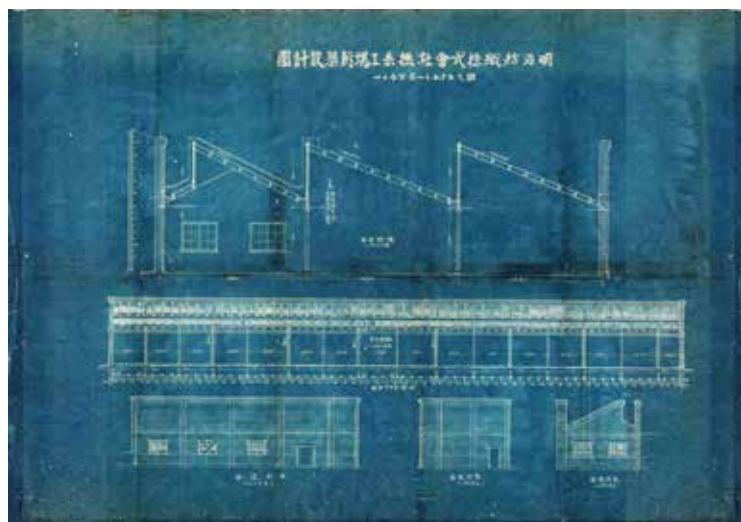
トチセン（旧足利織物）赤レンガ捺染工場・
赤レンガサラン工場
国登録有形文化財
（平成11年11月18日）



赤煉瓦捺染工場



赤煉瓦サラン工場



明治紡織株式会社燃糸工場新築設計図（原図）

株式会社トチセンは、1913（大正2）年に地元資本の企業として足利織物株式会社が創業し、翌1914（大正3）年に操業を開始した。中央資本による統合として、1919（大正8）年に明治紡織株式会社となる。1949（昭和24）年、明治紡織株式会社と栃木整染有限会社が統合して、栃木整染株式会社となる。なお、栃木整染有限会社とは、1943（昭和18）年に発足した栃木県整染有限会社が1945（昭和20）年の戦時統合令の解除を受けて発足した会社である。その後、1974（昭和49）年に栃木整染株式会社から現在の株式会社トチセンに社名変更した。現在も工場として現役稼働する煉瓦造工場群は1922（大正11）年に建造されたもので、織物産業で隆盛を極めた近代足利の面影を今に伝える貴重な煉瓦造建造物である。

建築的特徴

煉瓦造の外壁と木造の内部軸組みからなる広大な工場棟。建築面積は1,587平方メートルあり、6連ののこぎり屋根が連続してかけられ、大規模な工場内部の空間をつくりだしている。

頂部まで立ちのぼる柱型と重厚な軒蛇腹とで縁取る妻壁の意匠や、出入口や窓などの大きな開口部を一石のまぐさ石で支える手法に特色がある。

産地として、ぐっと盛り上がる一つの拠点でした。そういうことを次世代の子どもたちにはちゃんと伝えていくこと。トチセンの105年の歴史もきちんと伝えないと、古い建物というだけであったら、子どもたちは関心を持たないと思います。

福島 一古い歴史的建造物を汚いとみるのが、文化的とみるかということだね。だから、それをきちんと伝えることによって、地域に対する思いが芽生え、それが未来をつくっていくわけですね。

秋草 一我々単独ではとてもできる話ではないと思っています。これは市をあげて県をあげて国をあげて取り組んでいくことによって、次世代に受け継いでいけるのかなと思います。

このような建物を壊さなければならなかったとき、壊さざるを得なくなった人に押しつけるのではなく、本当の地元の宝として保存するという思いが地域全体で湧き上がってくるか、が大事ですね。

これからのまちについて

秋草 一私は地域のいろいろな役職を仰せつかっていますが、その中でも、メインは織姫神社や織物会館です。これもやはり、街として一番の貴重な資産をどう守っていく

かということなんです。なんといっても、今の足利を象徴する観光資源ですからね。

現在、あしががフラワーパークには年間20万人がきますが、織姫神社には50万人、足利学校には12万人だけです。まちなかに人が集まっていないというこの現状を、どう打開するかです。足利にとって観光産業は大事であり、太田や佐野と比較しても足利は取り残されています。足利はよそから人が増えないし、そういうチャンス逃しています。この現状も踏まえて、我々は地場にいる以上、大切な観光資源やにぎわいのあるまちを次の世代につなげていかなくてはいけない。私もそろそろ、次の人たちにバトンタッチしたい。次の人にうまく引き継いでいかないといけないと思っています。

大学とまちのかかわり

秋草 一現在、私は足利大学の理事で、とくに地域連携の担当です。足利では宇都宮大や文星芸大など他の大学の活動もありますね。他の大学と協力体制を取りながら、本学にももっと前に出てほしいと思います。地元で大学ですからね。

私は卒業生であるし、大学で理事もやらせてもらっていますから、地域との結びつ

きには我々が協力します。結びつける役を我々に言ってくれば、いくらでもやりま

すよ。
大野 一本当にありがたいことです。われわれの冊子はまだ第1弾を出したところで、これからです。どうしても自分たちの知っているところからはじまってしまいます。地場の人とながって、また新しいつながりをつくっていく。知らない人が知っている人を繋げていけば、もともとと広がっていくと思います。これがこの冊子の役割だと思っています。

秋草 一我々も今後も変わらず、地元を盛り上げていきたいと思っています。さっきお話ししたようにトチセンの工場群も次の世代に繋げていかなければなりません。やはり色々な人のアドバイスも頂きたいし、またお力をお借りしたいと思っていますので、広いつながりが必要になります。ほかの団体についても同じだと思います。

本学であれば、多くの地で活躍しているOB・OGがたくさんいますから、そういう人たちに協力してもらおうの必要かなと思いますね。タテヨコのつながりをもっとつくっていきけるといいですね。



大久保分校スタートアップミュージアム
〒326-0012 栃木県足利市大久保町126
<https://www.start-up-museum.com>

大久保分校外観



金子未弥「コスモスが咲いたら花束を作って誰か知らない人に渡してください」展示風景



西村大喜「座りたい竹」展示風景



工房の様子

ういったことが栃木県でもできたらしい、地域おこし協力隊として戻ってきた形になります。また、10年間東京で暮らしたこと、海外で活動したことによって地域間の文化格差を感じるようになりました。特に子供たちにおいては少子化、過疎化、核家族化が進み、色々な人に揉まれて過ごすことが少なくなったように思います。自身も地方出身者として、どうしても地方では考え方が固定化しているように思うことがありました。現代アートは近年、環境問題、民族問題、ジェンダー等様々な問題をテーマにしたものも多く、多様な価値観に触れる最良のツールだと考えています。アーティストの作品に触れることで、アーティストの考えを知ったり、ものの方が変わったり、様々な体験を私自身経験することが

できたので、そういったことが地方でも体験できたら良いなと思ったのがきっかけです。また、移住者として足利は歴史や文化のある素敵な街だと感じています。私が来た頃には既にあしかがアートクロスなどのイベントも行われていて、活動するアーティストも多いように思いました。逆に私たちの企画がきっかけで訪れたアーティストも足利の街の雰囲気を感じ入ってくれる方が多く、アーティストにとって過ごしやすい街のように思います。アートイベントとなると期間中だけでなく盛り上がる形になってしまいますので、常にアーティストや地域の方が訪れたり、楽しんだりできる場の必要性を感じ、美術館としての立ち上げに至ることになりました。



足利市内のアトリエにて

書き手
秋山佳奈子

秋山佳奈子

地域資源を活用したアートによるまちづくり 廃校×アート

活動の内容

大久保分校スタートアップミュージアムは、毛野地区にある閉校となった毛野小学校大久保分校を改築し、2022年4月にオープンした現代アートの美術館です。展示・作品販売の機会の提供などをはじめとした若手アーティスト支援や、工房での本格的な制作体験の提供を行なっています。また、ご希望に合わせてプログラムの提供も可能で、地域の小中学生等を対象とした出張ワークショップや鑑賞授業、教員向けの講習会等も行なっております。訪れる方が気軽にアートを「見る」こと、「つくる」こと、さらに作品を「買う」ことも可能な、様々なアート体験ができる場所となり、地域の交流の拠点となることを目指しています。

活動を始めたきっかけや問題意識

栃木県の出身ですが、大学進学を機に東京に行きました。大学では主に銅版画を学び、研究室の助手を経て国内外での展覧会、アーティストインレジデンスへの参加等、作家として活動をしてきました。大学院に在学中、群馬県の中条町で行われている中之条ビエンナーレに参加し、地域資源を活用した展覧会を行うことで人の往来を生み、地域が元気になるっていく様を目の当たりにし、こ



土屋未沙「飼育小屋ラブソディ」廊下での展示風景



県内の学童指導員の方々にダンボールで服を作るワークショップを開催



足利市立名草小学校でのシルクスクリーンワークショップ



足利市立名草小学校でのシルクスクリーンワークショップ

アーティストと地域が出会う場へ
 社会学者のリチャード・フロリダの研究で「ボヘミアン・ゲイ指数」というものがあります。芸術家や同性愛者が多い地域は、多様な文化や価値観を受け入れることが出来、様々な人材が集まりやすく、この指数が高い都市は地域の経済が成長し、豊かになるといったものです。より多くのアーティストと地域が関わっていく場に成長し、地域の活性化に貢献できればと考えています。

今、具体的に考えていることは展覧会企画の公募です。現在展覧会は、担当学

苦肉の策で現在の寄付形式に落ち着きました。これはニューヨークのメトロポリタン美術館で2017年頃まで行われていた「ペイ・アズ・ユー・ウィッシュ」のポリシーを参考にしています。メトロポリタン美術館は国立のため、どんな人にもアートに触れる権利があるという考えから、20\$までの値段であればいくらでも、たった1\$でも入場できる形になっていったそうです。そういったアイデアを色々ところから拝借し、工夫して運営しています。

その反面、自由度も高い美術館ではあるのでスタッフの意見が通りやすい所は良い点かもしれません。オープン前のリノベーションもボランティアさん達と協力しながら行なったので、その場その場

芸員とスタッフでアーティストの選定を行なっておりますが、公募でより多くのアーティストに関わってもらいたいと思っております。美術館と銘打ってはおりますが廃校を活用していますので、キュレーションによっては様々な表現が可能です。そしてキュレーター、学芸員を目指す人たちはなかなか実践の場が見つからないと聞きますし、都市部のアートシーンでは、アーティストによって形成された集団（アート・コレクティブ）による展覧会のような、アーティスト主体で企画・運営が行われる展覧会が主流になりつつあります。そのような面白い企画ができる、実践したい方々を公募にて発掘したいと考えています。美術館がアーティストと地域とのハブ的存在に成長し、関係人口を創出し、地域の方々、

現代アートは難解だと思っていられない方も多いかと思いますが、アーティストたちは日々日常を生き、考えたイメージを作品化しております。読み解いてみれば決して難解なものではありません。難しく考えずに気軽に楽しんでいただけると嬉しいです。また、アーティストによってはその土地のリサーチを行ったり、地域とのコミュニケーションをベースに作品を作る者もおります。何かしら地域の方のお力が必要な場面もあるかと思っておりますので、ご協力いただければ幸いです。

いと考えています。また、今後は海外のアーティストとの展覧会の予定もありますので、地域から世界と繋がって行けたら面白いのではないかと考えています。

他の世代に望むこと
 現代アートは難解だと思っていられない方も多いかと思いますが、アーティストたちは日々日常を生き、考えたイメージを作品化しております。読み解いてみれば決して難解なものではありません。難しく考えずに気軽に楽しんでいただけると嬉しいです。また、アーティストによってはその土地のリサーチを行ったり、地域とのコミュニケーションをベースに作品を作る者もおります。何かしら地域の方のお力が必要な場面もあるかと思っておりますので、ご協力いただければ幸いです。

例えば入場料、定額の入場料をいただく方法も考えましたが、地域に根差した美術館にしたいという思いがありましたので、気軽に来てほしいという考えから大変です。

あしかがアートのクロス等市内のアーティストイベントへの協力、連携を行なっています。足利市立美術館ミュージアムショップでも連携展示やアーティストグッズの販売を行い、まちなかから来てもらう流れをつくっています。また、中心市街地で行われているイベント等で出張ワークショップを開催することもあります。ジャンルに囚われず、アートをきっかけに地域を活性化させたい方々と連携した

自由度の高い美術館を目指して
 施設を運営していくことは、そこにランニングコストが生じます。建物自体も古く、しばらく使われていなくなったため、補修が必要な箇所が次々に出ってきます。公立でなく、私立の美術館になりますので、そういった必要経費のため資金調達も行っていかねばなりません。美術館のあるべき公益性とコスト面のバランスが非常に難しいと感じています。そのため、色々知恵を絞って工夫しなければならぬ点が多いのが大変です。

地域から世界へ
 あしかがアートのクロス等市内のアーティストイベントへの協力、連携を行なっています。足利市立美術館ミュージアムショップでも連携展示やアーティストグッズの販売を行い、まちなかから来てもらう流れをつくっています。また、中心市街地で行われているイベント等で出張ワークショップを開催することもあります。ジャンルに囚われず、アートをきっかけに地域を活性化させたい方々と連携した

シルクスクリーンによるワークショップの作例
自分で描いた絵を布等に印刷ができる鈴木希果によるワークショップ「ヤギ Poo プロジェクト in 足利」
校庭にて野焼きで陶器を焼く様子

土屋未沙 足利市立美術館ミュージアムショップでの連携展示



土屋未沙「飼育小屋ラブソディ」展示風景



図4 新企画ロケの様子 (2022年12月26日)



図5 えんまルシェ (2022年8月16日)



図6 門前マルシェタープお披露目 (2023年3月12日)



図7 続・キッチンカーフェスティバルのチラシ



図8 続・キッチンカーフェスティバル準備

開催に協力することでまちを盛り上げようと活動をしています。

8月には、「えんまルシェ」の開催に準備から撤収まで全面的に協力し、あしもり隊のブースも出店しました。

また、門前マルシェ実行委員会からオフアアがあり、門前マルシェの各店舗が使うタープの共同開発を行いました。

組み立て・片付けが簡単に出来る折りたたみ式のオシャレなタープが完成し、3月12日の門前マルシェでお披露目しました。

③続キッチンフェス2022 (10名) (図7〜9)

「電車の待ち時間が長い」、「周辺に空き地空き家が多い」というJR足利駅周辺の課題解消のため、10月28日と翌年の2月22日

にJR足利駅北口駅前広場で続・キッチンカーフェスティバルを開催しました。

市内の高校生を中心に約5000人に対して実施したアンケート調査結果と、前回の反省点を活かし、開催時間と出展店舗を決定しました。

市内の全高校生へのチラシ配付や、あしもりTVでの告知動画発信、CRT栃木放送での開催告知など広報面に力を注いだことから、当日は、大盛況となりました！

④WKE (ウエストキッチンカーイベント) (7名) (図10&11)

キッチンカー等飲食店を絡めたイベントを、WKE全メンバーが通う足利清風高校がある西地区で開催しようとする準備を進めていましたが、新型コロナウイルスの影響に

より残念ながら中止となりました。

この経験を経てイベント開催に必要な知識や計画性を学ぶことができたのでコロナ禍が落ち着き次第実現したいと考えています。

また、観光まちづくり課からオフアアがあり、1月28日開催の「聖地！西高一般公開」のロケ弁販売コーナーのプロデュースを行いました。販売するロケ弁を試食して決めたり、実際に西高へ行きロケ弁販売コーナーのレイアウトを考えたり、ロケ弁の魅力が伝わるようにPOPを作ったり、準備をしっかり行ったこともあり、当日は無事にロケ弁を完売させることができました。

⑤あしもり隊全体として (図12〜17)

ミーティングは、これまで全体で8回、



図1 あしもり隊の生徒のみなさん、記者会見 (2022年7月12日)



図3 あしもりTV 宣伝カード



図2 YouTubeチャンネル「あしもりTV」開設発表会 (2022年9月8日)

書き手
あしもり隊
小林孝之助
(地域パートナー)

あしかが高校生クラブ あしもり隊

高校生が足利を盛り上げたい

活動の内容とそのきっかけ

あしかが高校生クラブ「あしもり隊」は2021年6月に結成されました。名前の由来は、「あしかがを盛り上げたい！」だから「あしもり隊」です。活動の目的は「足利市を明るく・楽しくさせること」、「足利市の魅力を発信すること」、「足利市が困っていることを解決すること」の3つです。

今年度は、「あしもりTV」、「まつりベンジャーズ」、「続キッチンフェス2022」、「WKE (ウエストキッチンカーイベント)」の4つのプロジェクトが誕生し、様々な活動を行いました。

①あしもりTV (3名) (図2〜図4)

「あしもり隊」の活動や足利の魅力をより多くの人に知ってもらうため、自分達で動画撮影・編集し、YouTubeチャンネル「あしもりTV」で発信しています。

9月にYouTubeチャンネル開設発表会を行い、これまでに9本の動画を発信しました。また、あしもりTV宣伝カードを制作し、配付を行いました。

12月からは新企画もスタートしました。自分たちで一から企画をし、動画を作るということにチャレンジしています。

②まつりベンジャーズ (2名) (図5&6)

担い手不足やコロナ禍などによりしばらく開催することができなかったイベントの



図14 鹿沼かえる組「やんぐ祭」(2022年10月16日)



図13 シルクスクリーン作業(2022年8月8日)



図16 JR足利駅構内クリスマスツリー装飾(2022年11月25日)



図15 わたしたちのこれから。あしかがのこれから。(2022年11月12日)



図17 鹿沼かえる組「成果発表会」(2022年12月18日)

成果の閲覧
<https://www.as hikaga-citypromotion.jp/news/?category=3>



今後の展望
メンバー数の拡大の他、市内全校からあしもり隊メンバーが出てきて欲しいと考えているので、各学校にP・R・プロモーションなどをどんどんしていきます。また、今年度誕生した4つのプロジェクトを成長させるとともに、新たなプロジェクトにもチャレンジしていきます。

他の活動団体へ
今年度オフアワーをいただき、協働させていただいた活動は、あしもり隊の実力に繋がっていると感じていきます。今後も、いただいたオフアワーには、できる限り協力させていただきたいと考えているので、「あしもり隊」の力が必要な団体の皆様には遠慮なくお声がけいただきたいです。



図9 続・キッチンカーフェスティバル当日(2022年10月28日)



図10 WKEのチラシ(コロナ禍のため中止)



図11 「聖地!西高一般公開」ロケ弁選定の様子(2022年12月9日)



図12 全体ミーティングの様子

その他プロジェクトチーム等で20回以上開催しています。

7月には、記者会見を開き、プロジェクト内容や、活動に対する想いを発表しました。

8月には、大久保分校スタートアップミュージアムで、あしもり隊メンバーオリジナルのユニフォームをシルクスクリーンで制作しました。

10月には、鹿沼の魅力を発信しようと活動している高校生クラブ「鹿沼かえる組」のイベント「やんぐ祭」にあしもり隊P・Rブースを出展しました。

11月には、青年会議所からオフアワーをいただき、まちづくりトークイベント「わたしたちのこれから。あしかがのこれから。」に参加し、高校生ならではの視点で足利の

まちの未来について、大人に混じって意見交換をしました。

12月には、「鹿沼かえる組」の「成果発表会」の視察や、JR足利駅構内のクリスマスツリーの装飾を行いました。

拡大する高校生の活動
参加学校数、メンバー数が、昨年度の2校(工業8、清風6)14名から、今年度は6校(工業5、清風11、足大附2、足短附1、佐野2、わせがく1)22名に拡大しました。

また、昨年度は、学校毎の活動が主でしたが、今年度は4つのプロジェクトチームの活動が主となり、学校も年齢も関係なく、やりたいことに取り組むことができました。

拡大する活動と新たな展開と課題

学校数、人数が拡大し、活動の日程調整が予想以上に大変でした。皆で年間予定表を持ち寄り、予定の合間を縫いながら、活動に取り組みました。
様々な団体からオフアワーがあり、「あしもり隊」の認知度向上、必要性を実感し、とても嬉しく感じた反面、スケジュール等の都合でお応えできなかったオフアワーもあり、どう応えていくかが今後の課題です。

新たに増えた連携先
「えんまろシエ実行委員会」、「門前マルシエ実行委員会」、「観光まちづくり課」、「足利青年会議所」、「鹿沼かえる組」、「あしもり隊OB」、「大久保分校スタートアップミュージアム」、「宇都宮大学地域プロジェクト演習」など



近代化遺産視察会 設立ツアー（2017年）



近代化遺産を後世に
（下野新聞 2017年5月23日）

これまでの活動の成果
年一回の総会および必要に応じて委員会を招集・開催して会務を運営しています。また、主たる活動として、『近代化遺産視察会』と、『近代化遺産講演会』を開催してきました。視察会は、実際に近代化遺産に触れ、体感することが目的であり、視察した施設から得られる、過去をとおした未来の創造の契機となることを意図しています。また、講演会は、近代化遺産の保存と活用によるまちづくりに係る知識の蓄積・地域コミュニティの再生に向けた議論を、市民を交えてさらに深化させていくことを意図して

活動をはじめた動機、どんな活動をしているのか
文化庁が主導し県が主管した近代化遺産調査が二〇〇一年から二年間行われ、二〇〇三年に「栃木県の近代化遺産―栃木県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」が上梓されました。この報告書の中で、足利市の近代化遺産は42件報告されています。しかしながら、二〇二三年三月の現存数は

26件で、この20年の間に16件が消失しています。近代化遺産のうち国や県・市の文化財として保護されるものがある一方、保護の対象から外れ知らないうちに消失してしまっているものもあります。消失してしまった近代化遺産は、文化財として評価されるほどの価値は希薄であっても、地域の近代化に貢献した貴重な歴史遺産であり、その時代を映し出す雄弁な「語り部」であることに違いはありません。足利市に現存する近代化遺産は、国登録有形文化財および県指定や市指定文化財として保護されています。また、保護の対象から外れていても、用途の変更や再利用等、何らかの形で使用されて

間的距離が近いことに加え毎日の生活の中で活用している施設も多くあることから、日々の暮らしに密着したより身近な文化財であると言えるでしょう。

26件で、この20年の間に16件が消失しています。近代化遺産のうち国や県・市の文化財として保護されるものがある一方、保護の対象から外れ知らないうちに消失してしまっているものもあります。消失してしまった近代化遺産は、文化財として評価されるほどの価値は希薄であっても、地域の近代化に貢献した貴重な歴史遺産であり、その時代を映し出す雄弁な「語り部」であることに違いはありません。足利市に現存する近代化遺産は、国登録有形文化財および県指定や市指定文化財として保護されています。また、保護の対象から外れていても、用途の変更や再利用等、何らかの形で使用されて

書き手
福島二朗



講演会（2022年）



バスツアー―富岡製糸場（2020年）



交流サロンでの光景（2017年）

足利の近代化遺産を考える会 岩本秀雄

近代化遺産の保存と活用による豊かな未来空間を考える

近代化遺産は身近で新しい文化財です
近代化遺産とは、江戸時代末期の横浜開港から第二次世界大戦終結までの間、欧米など先進諸国からの新しい技術・制度・文化等の導入によってつくられた建造物や施設を指しています。具体的には、交通（鉄道・駅舎・橋梁・トンネル等）、土木（ダム・発電所・上下水道等）、産業（造船・醸造・製織等）、さらに建築（官公庁舎・学校・教会・洋風住宅等）など、わが国の近代化に大きな役割を果たしてきた建造物に史的文化的価値のこもったものです。足利は、「歴史と文化のまち」と言われ、わが国の歴史に名を刻む「足利学校」や「鏝阿寺」など世界遺産登録を目指す著名な歴史資源と、それらを包みこむ趣きを醸し出す豊かな景観に恵まれています。一九二三年に完成した当時における造園学の第一人者で日比谷公園や明治神宮神苑の設計者である本多静六は、「足利市ハ史蹟ニ富ミ旧蹟アリ風致マタ良ク、都市其ノママガ公園トシテノ性質ヲ有スル」と言っています。ここで言う史蹟・旧蹟は前述の足利学校や鏝阿寺を指しており、これらの史蹟は足利の歴史文化を象徴する重要な地域資産です。ただし、中世という時間的距離の隔たりから、現在の私たちの日常生活の中に息づいているかと問われれば、必ずしもそうとは言えないかも知れません。一方、近代化遺産は、歴史遺産としての時



講演会 (2021年)



講演会 (2021年)



講演会 (2020年)



講演会 (2018年)



講演会 (2017年)

④ 近代化遺産の保存と活用を考える講演会

- 講演 3 真田純子氏 東京工業大学環境・社会理工学院准教授
- 土木の近代化と石積技術
- 講演 1 福島二朗 足利大学／当会役員
- 足利市近代化遺産の現状とこれからの活用に向けて
- 講演 2 分田久貴氏 栃木県土木整備部 参事 安足土木事務所長
- 中橋の3連アーチを保存した架替事業について

③ 近代化遺産の保存と活用を考える講演会 (2020.11.28)

- 基調講演・佐々木葉氏 早稲田大学創造理工学部教授
- 歴史的鋼橋がつなぐ物語ーりんどう橋と霞橋の事例からー
- 講演 福島二朗 足利大学／当会役員
- 足利市近代化遺産の概要について
- ② 近代化遺産の保存と活用を考える講演会 (2018.11.11)

- 群馬県の近代化遺産ー保存と活用ー
- パネルディスカッション
- コーディネーター・岩本秀雄／当会会長、パネラー・上記の講師4名

マネージャー／当会委員

- ⑤ 近代化遺産の保存と活用を考える講演会 (2021.11.27)
- 講演 1 福島二朗 足利大学／当会役員
- 近代土木遺産としての中橋の評価と今日的意義
- 講演 2 永村景子氏 日本大学生産工学部専任講師
- 近代化遺産を「まもる」「継ぐ」「まちづく」ー世代をまたぐ「記憶遺産プロジェクト」の実践紹介ー
- 講演 3 西村祐人氏 修復建築家、(株)デザイン・フォー・ヘリテージ代表
- 保存と創造の境界線から考えるー歴史的建造物を活かす「ツギハグデザイン」のいろいろ

⑤ 近代化遺産の保存と活用を考える講演会 (2022.11.26)

- 報告 羽山弘一氏
- 澤田正好先生と旧私立足利盲学校の顕彰碑の建立
- 講演 1 福島二朗 足利大学／当会役員
- 土木学会選奨土木遺産の今日的意義とこれからのまちづくり
- 講演 2 佐々木憲仁氏 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所調査課長
- 渡良瀬遊水地に係わる最近の取り組み

- 基調講演・北河大次郎氏 東京文化財研究所(現文化庁文化財部参事官付文化財調査官)

- ① 設立記念シンポジウム 近代化遺産の保存と活用ー地方都市のまちづくりを考えるー (2017.10.28)

【講演会・シンポジウム】

この大要は、以下のとおりです。

これまで開催してきた講演会・シンポジウム、およびツアー等による視察会についての要約は、以下のとおりです。



近代化遺産 活用への一歩 (weekly 両毛 2018年10月3日)



バスツアー足尾砂防堰堤 (2018年)

これからの近代化遺産を考えるー我が国の近代化遺産保護に係るこれまでの経緯とこれからの役割ー

- 講演 1 福島二朗 足利大学／当会役員
- 足利の近代化遺産ー全国総合調査から現在までー
- 講演 2 渡邊美樹氏 足利大学工学部教授
- 足利市の近代和風建築ー保存活用に向けての課題ー
- 講演 3 長井淳一氏 郡馬県ヘリテージ



足利の近代化遺産 私立足利盲学校



足利の近代化遺産 渡良瀬橋



足利の近代化遺産 足利模範縫糸工場



足利の近代化遺産 木村浅七工場事務所棟

これからの活動に向けて
 当会は、二〇一七年に発足した市民サークルです。歴史的な建築物や土木施設・構造物、さらに文化やまちづくり等に興味・関心のある市民有志の勉強会としてスタートしました。諸々述べてきたように、対象となる近代化遺産はすでに耐用年数を超過し維持管理が困難なものも多く含まれ、年を経るたびにその度合いはますます大きくなっていきます。保存・継承に向けて、まさに待ったなしの対応が求められています。歴史遺産を単にノスタルジーとして保存・鑑賞す

るのではなく、時代のニーズに即した活用をとおして新しい文化の萌芽となる活用手法を見出していくことが重要であると思います。次の時代のまちづくりや建築行為に取り込まれ新たな役割が付加されることで、これらの歴史的建造物はさらに長い時間を生き続け、新しい価値と魅力を創出していきます。賛同者みなが同じ方向を向いて動きはじめたこの活動、全国の関連団体や眼差しを持ったみなさんとともに議論し知恵を出しながら、歴史文化の香る豊かな時空を創っていきたくと考えています。

なお、当会は、広報部会と盲学校部会の2つの部会を設置しスタートしました。この冊子では、紙幅の関係から広報に係る部会の紹介に止めています。盲学校部会も鋭意活動を進めていますので、その詳細については次の機会に委ねたいと思います。

- *その他の講座等
- ① 近代化遺産を考える情報交流サロン (2017.8.19)
 - ② 近代化遺産講座／古民家N邸にて (2018.9.22, 10.20, 11.10, 12.15)
 - ③ CON展 en ASHIKAGA 2019 わくわくアート、街にひろがれ
 福地晴香が描く△足利市近代化遺産イラスト画展 (2019.6.1～9)
 【バスツアー等による視察会】
 - ④ 設立記念ツアー／足利の近代化遺産を歩く (2017.6.3)

- 旧国鉄足利駅舎、旧私立足利盲学校、旧東両毛通運倉庫、中橋、渡良瀬橋、旧木村輸出織物工場
- ② モニターツアー／国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所との共催 (2018.1.20)
- 関宿城博物館、江戸川水閘門、今上落、利根運河、田中調整池・野田樋門
- ③ 治水を学ぼう／砂防堰堤の役割と歴史的橋梁の役割を学ぶ (2018.8.27)
- 第二渡良瀬川橋梁、第一松木川橋梁、古河橋、足尾砂防堰堤、松木川一号砂防堰堤、関守

- 床固群
- ④ 近代化遺産視察会 (2020.8.2)
 旧木村輸出織物工場工場棟・同事務所棟、旧三間道路、旧国鉄足利駅舎、旧私立足利盲学校
- ⑤ 近代化遺産バスツアー／富岡製糸場と碓氷第三橋梁を巡る近代化遺産の旅 (2020.10.31)
- 富岡製糸場、碓氷第三橋梁、旧丸山変電所
- ⑥ 近代化遺産バスツアー／那須野が原の近代化の精華を巡る旅 (2022.11.5)
 黒川発電所膳棚水路橋、晩翠橋、那須疏水、旧青木家那須別邸



足利の近代化遺産 中橋



足利の近代化遺産 水道施設群



足利の近代化遺産 旧足利織物株式会社



図3 ジモトの木プロジェクトのパンフレット

林業では、木を伐採・加工し、実際に建物などになるまでの過程を川上、川中、川下と表現します。川上は木を育て整備し、伐採を行う林業従事者など、川中は木材を加工する製材業者など、川下は木材を使用・活用する建築業社や家具製造者などを指します

したが、実際に木を切ってもらう人も必要なので、市内の松田地区で林業を営んでいる萩原さんを紹介してもらいました。そうして、2022年4月にジモトの木プロジェクトを木に携わる三社（川上・林業、萩原林業株式会社、川中・製材、有会社社マルトツ、川下、加工、株式会社昭栄家具センター）で立ち上げました（図1&3）。木に携わる三社がつながること、地元で伐採された木材がより使いやすいくなります。地元の木を使うことで、森の循環が良くなり、地元の森を守

第4号作品は Volo Ashikaga サイクルフェスタで使われたサイクルスタンドです（図7）。これも市からの発注です。

暮らしを守ることにつながります。第2号作品は子どもの椅子です（図2）。プロジェクトが立ち上がって最初につくりたいと思いました。このプロジェクトは未来を託す子ども達が安全、安心して暮らせる森を残したいという想いからはじまったもので、それを形にしたいと思ったからです。そして、子どもたちに地元足利の木に愛着を持ってほしいとも思いました。第3号作品は Milano design week 2022 で発表した「コンソールテーブル」です（図5&6）。地元足利市で伐採したヒノキ材で製作しました。栃木県のヒノキは、日本のヒノキの北限ラインにあり、栃木県より北にはヒノキ材は生息しません。ヒノキにとって厳しい自然環境で生育した栃木県足利市のヒノキは、しなやかながらも強度があります。コンソールテーブルの細い脚も見かけ以上にしっかりしています。



図2 地元の森を守って、未来を託す子どもたちにつないでいくという想いを形にした建彦木工「うさぎの椅子」

話し手
清水（和木）佐恵子

聞き手
大野隆司

インタビュー日時：
令和4年12月13日



図1 ジモトの木プロジェクト

株式会社昭栄家具センター 清水（和木）佐恵子 ジモトの木プロジェクト

活動内容ときっかけ

市の担当者からJR足利駅に設置するベンチ制作を依頼されたことが、このプロジェクトを始動するきっかけになりました。私たち株式会社昭栄家具センターは2015年に建彦木工というブランドを立ち上げました。そのときから、地元足利の木を使うことをずっと模索してきました。市の担当者に地元の木を使えないかと相談すると、市内の名草地区で伐採できる木があることを伺いました。そこで、いつもお世話になっている地元の製材会社マルトツさんに5〜6mの杉丸太を2、3本に切って運搬してもらいました。60cmぐらいの太さだったので、このとき、地元でもこんな良いものがとれるのだと思いました。運搬後に、マルトツさんが乾燥させて、製材までしてくれました。その後に、足利出身の建築家である柿澤高子さんが主宰するカキノミアームアーキテクトゥさんに頼んでJR足利駅に相応しいベンチをデザインしてもらい、私たちが制作しました。これがジモトの木プロジェクトの第1号作品になります（図4）。

地元の木をつかう可能性はみえてきま



図6 ミラノデザインウィーク 2022



図5 建彦木工「コンソールテーブル」



図4 JR足利駅に設置されたベンチ



図8 ジモトの木プロジェクトの焼印



図7 ジモトの木プロジェクトのサイクルスタンド

ジモトの木プロジェクト
<https://marutotsu.co.jp/localtree/>

他の世代に臨むことはありますか？
 地元のイベントには地元の木を使って地産地消して欲しいですね。この取り組みが良いことだと分かっているにもかかわらず、若い人たちの手にもひろげていかないといけないと思っています。

われわれはこれまで卸しなどBtoB(企業間取引)でやってきましたから、一般消費者に直接届けるBtoCに対する不慣れなどにはあります。外に発信していくことは難しいですね。

問い合わせ・相談

有限会社マルツ
 電話 / 0284 - 41 - 8288
 (平日 8:00 ~ 17:00)
 メール / WEB にアクセス
 し「お問い合わせフォーム」
 からご連絡ください。



しかし、このプロジェクトを続けるためにはいくつも課題があります。地元足利で素晴らしい木材がとれたとしても、木材は、製材、乾燥をしてから販売されず。

活動の中で、苦労しているところ、楽しいところはどこですか？

地元材を使うことは、多くの方の協力ができないとできない難しさがあります。それを乗り越えて、たくさんジモトの木の押印を見ると感慨深い思いがあります。

第5号は地元足利の方から依頼された座卓です。これは杉を使いました。この1年間で必ずしも数は多くはありませんが、少しずつジモト(足利産)の木を使うことができたように思っています。

足利市内で開催されるイベントだからこそ、地元の木でつくってはどうかと思いましたが、萩原林業さんに御協力いただき足利産の杉材で製作しました。ただ見た目では地元の木だと分かりません。だから、「ジモトの木」で作られた証としてプロジェクトのロゴが入った焼印を押印しました(図8)。

現在、どんな方々と連携していますか？
 林業、萩原林業株式会社、製材、有限会社マルツに加えて、アートディレクションなどを市内で活躍しているアルニコデザインの平塚大輔さんと連携しています。平塚さんにも加わってもらって、ブランド化に取り組みました。全体のコンセプト、ブランドロゴ、ネーミング、パンフレットなどは平塚さんの協力を仰いでいます。

今後の活動はどのように展開していきたいと考えていますか？

川下(使う人)のメンバーを増やしていくことが一番の課題です。また、小径木などをうまく利用することで需要を高めることも求められるように思います。



東日本大震災におけるボランティア活動の集合写真
(上：左端が鈴木光尚氏、下：中央が鈴木光尚氏)

具体的な活動内容
 阪神淡路大震災の時は3日目から神戸に入りました。東日本大震災では150回以上東北の現場でコーディネート活動などをしました。また、足利高校の生徒さんを被災地の現場に連れて行くこともしました。東北の被災者・被災地には現在も関わり支援活動を続けています。

活動を継続してきた理由
 なぜこれまで活動が続けられてきたのかは、やはり、活動自体は苦しいこと、厳しいこと、つらいことはいっぱいあるけれども、絶望の極致におられる方々が、

のボランティアたちの研修・指導で東奔西走の日々となりました。
 マザー・テレサとの出会いもそのご縁からです。インドにも行きました。彼女は私に静かにこう話しました。「飢えには二つある。ひとつはモノの飢え。もう一つは心の飢え」だと。私はこれまでの効率一本やりの価値観を変えて、「何かを他人に譲る意思」ボランティア“に向き合う必要があると確信しました。

話し手
鈴木光尚

聞き手
北村隆



関係団体日米国際会議の日本代表として挨拶（挨拶する鈴木光尚氏）

足利市民活動センター長 鈴木光尚

自分たちの足利を自分たちの手でつくる

どんな活動をしていますか

足利市民活動センターの運営・管理をしています。社会貢献活動に一步でも踏み出そうとしているボランティアやNPO法人の自立・成長を支援・応援することが目的です。

また、当センターは情報のハブ機能（受信）とともに、これまで培ってきた豊富な全国ネットワークの利活用も担っています。企画展・NPO講座・まちの縁側（読書サロン）などのセンター企画へ参加される市民の方々との重層的なつながりを促進しています。

活動をはじめた理由

足利市民活動センターに関わるようになったのは、故・吉谷市長から強い強い要請があったからです。

振り返ってみれば、私とボランティア活動とのかかわりは、大学生の時代からで、初めは山谷での支援活動からです。その後、水保での胎児性水保病患者救済の活動もするようになりました。そのような活動がきっかけで、日本初のボランティア活動推進ナショナルセンター（社）日本青年奉仕協会（JYVA）に関わり、常務理事として、全国



足利生まれの世界的な映画作家 想田和弘氏
と同夫人。
2013年、足利市民プラザでの講演を依頼



宮城県山元町の被災現場でボランティアに取り
組んだ足利高校1年生19名の記念写真



作家 花崎皋平氏。
2015年、足利市民活動センターで「渡良瀬
～生きる場の風景」をテーマに講演

その中にありながらも、我々のサポートの際にみせてくれる、一瞬の笑顔や安らいだ心の襷が、我々を癒やしてくれたからだと思います。我々は彼らをサポートしていると思っただけでも実は、我々が彼らに癒やされ励まされて来たのだと今更ながらに思っています。

多彩多様な人たちの“つながり”

老若男女、多彩多様な人たちの“つながり”の中で活動をこれまで続けてこられたと感じていますが、やはり大切なことは“当事者意識”を持てるかどうか勝負だっただけだと思っています。時代の流れの中で、私たちの想像を超えるような新しい革新的なものが生れてくる予感はあるので、そういう意味、破天荒な、たとえば「STAY HUNGRY STAY FOOLISH」と言い切ったステイプ・ジョブズのような若者に出会い、つながって行ければ楽しいと思っています。

今後の活動について

多彩な市民が気軽に集い・学べるような場でありたいと思っています。イメージは「ちゃぶ台」。何を載せてもいい、誰と食べ

てもいい。食卓にもなれば、雑談の場にもなる。“自分たちの生活 自分たちの足利を自分たちの手でつくる”。そんな活動を下支えするような、風通しの良い場づくりをして行きたいと思っています。

他の世代に望むこと

中・高年の方々にはこれまで身に積まれてこられた経験を知恵として次世代につなご、青少年・若者たちは、可能性というものを過大評価して、先行世代にぶつかって欲しいと願っています。センターという場は、双方がぶつかることによって発するエネルギーを養分として吸収・成長したいと思っています。

活動の交差点として、出会うの場として

多様な多彩な団体の活動の交差点として、出会うの場として、センターを活用して頂きたいと思っています。

さいごに、これまでの活動を通じて伝えたいことを教えてください。

まず、“現場”を知って欲しいと思っています。“現場”には厳しいこと、辛いことなどがいっぱいありますが、解決の“芽”もきつ

とあるに違いないと思っていますので！
日比谷派遣村で感じたのは、学生時代経験した山谷です。“山谷”という狭いところの悲惨さが、時代を超えて、全国にじわじわと広がっているという実感が、やりきれなさ”と、怒り”とともに心底湧き上がっていました。

足利市民活動センター Ashikaga Citizen Active Center
326-0052 足利市相生町 1-1
受付時間：10:00 - 19:00 利用時間：9:00 - 22:00
休館日：土日祝日、第3月曜（祝日の場合は、翌日）
TEL：0284-44-7311 FAX：0284-44-7312
URL <http://www.shimin-act.jp>



「ピピっと! 足利いどり物語」足利・青葉小学校で全校生徒への公演 (2022.11.21)

郷土愛・再確認からの深まり
フリーアナウンサー&放送作家として、二十年の活動を経て、子育てをきっかけに住んでいる川崎から表現教育を始めました。とはいえ、心の休まる場所は足利にありました。ラジオDJを志し上京しましたが、どんなに忙しくとも、帰省を欠かすことはありませんでした。私は思うのです。人生には日々試練があります。ですが、心の拠り所を持つ人間は強くなれます。だからこそ、今、足利で育まれている子ども達が、郷土愛を持てるといういな、故郷が心の拠り所になるといいなと、そう心から願ったのです。

そして私は機屋の四代目の娘です。やはり『織物のまち』を意識せずにはいられません。取材は織物伝承館で銘仙と出会い、旧木村浅七邸で当時の織物富豪たちの町づくりを知り、トチセンの赤レンガ工場から近代化遺産のリノベーションと応用力を学び、故郷の歴史や文化を認識できた喜びと共に、自身の郷土愛が深まっていきました。この感動と想いを子ども達に伝えられるなんて!と、ワクワクした心持ちで脚本に取り組みました。

『ピピっと! 足利いどり物語』への道
児童演劇、人形劇、市民劇の作り手として十七年、一人語りを創作・実演し始めて六年となります。小学校での公演活動を目指して完成した物語の登場人物は、九十一歳の曾おばあちゃんと六歳の曾孫です。大正から昭和の始めに一世を風靡した足利銘仙を軸に、織物の歴史、織物富豪の地域貢献、市政や戦争との関わり、近代文化遺産などなど、子ども達の興味は個々で違ってきます。多様な情報をさりげなく伝えられるようにエンターテイメント性も重視しました。人形やペープサートで子どもが感情移入できるキャラクターを加え、三味線や鳴り物で足利古謡を取り入れ、講談の手法も活用し、単調になりがちな一人語りにも工夫を施しました。ボランテアのおばちゃん、ただ歴史を語ったところで子ども達の心には種を蒔けないと思いました。子ども達に楽しんでもらえるよう、あの手この手!語り手も面白がらないと聞き手には伝わりません。子ども達との真剣勝負です。真剣勝負はまず、令和四年六月の旧木村浅七邸での試演会からスタートし、毛野南小学校、白百合学童、青葉小学校、梁田公民館へと



「ピピっと! 足利いどり物語」旧木村浅七邸での試演会 (2022.6.4)

書き手
成澤布美子

表現教育活動家・表現者 **成澤布美子**

表現教育を軸に、多世代交流の場を作る

活動内容とそのきっかけ

とてもプライベートなきっかけでした。故郷・足利をこよなく愛し、足利の歴史小説を書き続けた父が他界したことにより、何か故郷の役に立てることはないかと、手前勝手ながらの親孝行・御先祖孝行だと思っています。それが未来を担う子ども達役に立てれば幸い、そう思いました。まずは、表現教育活動家として、小学校教諭の妹と、所属している日本演劇教育連盟の大先輩で現在・名草に永住している田部井泰さんと、『アプライド・ドラマ』というドラマ教育のワークショップを市民団体「ジョイDO」として開始。春・夏・冬休み期間でのボランティアアスタートです(現在・六回開催)。この活動を始めた頃、一人語り等の表現者でもある私を知る父の歴史仲間から「子ども達に歴史を語り継いでほしい。」と依頼がありました。足利の歴史も幅が広く、何をどう語ったら子ども達が郷土愛を育んでくれるかと悩みました。まずは自分の足で取材してみないことには脚本を描けないからです。私の故郷歴史探訪が始まりました。



2021 冬休み



2021 夏休み



2022 夏休み



2022 冬休み

が出来ないと実感しました。子どもを育てながら、自分も生き直したように思います。だからこそ、大人が教えるのではなく、互いを尊重する気持ちが必要だと思っています。私が今、足利で出来ることは、『ビビッと！いろいろり物語』を小学校・公民館・学童などで体感として伝え、『アプライド・ド

ラマ』というドラマ教育法を多世代の方に体験してもらいたい。その機会を少しずつ増やしていけるよう、表現教育の理解者・支援者の方々と手を繋ぎたい。足利の昔話をアプライド・ドラマに仕立て、市民の皆さまと経験してみたい。大きな輪が広がっていくことを願ってやみません。

作品を通しての地域連携
この物語を作るきっかけとなったのは、父・松崎洋二が立ち上げた「リビルドの会」会員の方からの依頼でありました。そして「ジョイDO」(表現教育の市民団体)が主体となり、取材を通じてご協力を頂いた方々をご紹介しますと：足利織物会館・秋草俊二理事長、織物伝承館、銘仙コレクター・橋本晴男さん、銘仙エキスパート・大森哲也さん、足利うさぎや・大竹麻実恵さん、足利きものガールズ・木村克子さん、旧木村浅七郎管理人・加藤忠司さん、そして足利藤の会の藤本直生久先生と社中の皆さま、沢山の方々のご協力のもと『ビビッと！足利いろいろり物語』が仕上がり、進化し続け、彩られています。演劇は総合芸術だと実感します。が、ここからが本番かもしれません。現状のままだと大人の自己満足で終わりがねないからです。「郷土愛の種を蒔くこと」だけではなく、「芽を育てること」も大事にしていきたいと思っています。

押しつけではない配慮の必要性
表現教育で大切なことは、自らの気付きです。「今、ここで、」気付くことはなくとも、何年か経って気付かされることもあります。表現教育の悩みでもありますが、現代では、時間の流れが速く、「今、ここで、」答えを出すことを要求されがちです。が、人の心は様々な事柄を吸収し、ゆっくりと育っていくもの。そしてそれは、人から人へと伝わっていくもの、ではないでしょうか。
私は西宮町で育ちました。当時は育成会が盛んで、年中行事も楽しく、家族ではない沢山の大人達から、叱られ、誉められ、励まされ、育まれました。その経験から、自身の子育ての中で、周りの子ども達にも、と自然と思えました。これを実践できたのは、西宮町の育成会のおかげ、関わってくださった多くの心ある大人たちのおかげです。

大人と子供の学び合い精神

子育てをして思ったこと：子どもから、多くを学びました。そして一人では子育て



岐阜県各務原市での「十二人の貞奴」公演



ラジオ日本「スイート!!」のゲスト出演

続きます。



設立時の記念撮影（上図は、活動のイメージ）



月1回ペースで市内各地をめぐる「草むしりの旅」



キタナカモールの様子



タープに描かれた
こともたちの絵

うようくなりました。
そんな時、北仲路地裏ワイン（2017年5月3日）の開催に合わせて（のちに登録有形文化財にもなる）旧岡崎家住宅で出張喫茶をやらせて欲しいと企画しました。色々準備をし、やってみると、3日間でのべ300人もの来客がありました。私たちはハンド・ドリップで淹れていきますので、お待たせすることもありますが、多くの来場者を迎えることができました。このような経験をを経て、私の妻も足利にだんだんと魅了され、足利で本格的に開業してみようという決意が固まりました。

2017年末頃には移住を決め、鏝阿寺西門の向かいの空きテナントに店を構えることができました。ここは路面店ではなく、2階ですが、窓から見える鏝阿寺の緑がとても素敵でした。広さはさほど大きくはありませんが、そこに決めました。それから三年を経て、現在の場所に移ってきました。移る直前には、3ヶ月ほど雪輪町にある三軒長屋「ゆきのわ長屋」の一角で雑貨屋八蔵もやっていましたが、現在のお店が完成し、珈琲と雑貨のお店としてリニューアル・オープンしました。

この建物も昔からこの場所にあった米蔵を活用したものです。もともと空きテナントだったこの店舗改修は自分たちでやれるところは自分たちでやりました。昼間は喫茶店を運営し、夜に来て改修作業する、とても多忙な時期でした。もちろん職人さんにやってもらったところも

同世代で商店会を結成します、草むしり

私が入会して来た頃、同じようなUターン組が近隣に数名いました。彼らと交流するようになりましたが、それが、のちの足利ミッドタウン商店会の仲間たちです。ある時、たびするおでんもつくもつくのご主人がきっかけとなり、北仲通りの草むしりをやろうと声をかけ、それから毎月1回の草むしりがスタート。その後、もつくもつくのご主人がかつて暮らしていた東京世田谷にある松陰神社周辺に視察に行こうということになりました。

話し手
梁川健人

聞き手
大野隆司

インタビュー日時：
令和5年4月14日



新店舗の改装時に撮った八蔵のメンバー、右から3人目が梁川氏（撮影：鈴木和博）



鏝阿寺参道にたつ八蔵の店舗

八蔵 店主 **梁川健人**

楽しいことを共有して、つながりを生む

現在、鏝阿寺への参道（大日大門通り）沿いで喫茶八蔵を営んでいます。私はUターン組で2017年に足利で開業してからこれまで、足利ミッドタウン商店会や「よりみちマップ」、「ほろにがウォーク」、「地域新聞 KITANAKA 100%」などを仲間とともにやってきました。本当にノリでやってきた感じで、これをやったら楽しそうだなと思って取り組んできました。「ほろにがウォーク」「地域新聞 KITANAKA 100%」はほぼ100%自費ですが、みんなで何かできたときの達成感の虜になっています。

きっかけは足利での開業と古民家の活用

2016年頃から喫茶店の開業を考えていましたが、理想的な場所になかなか巡り合えませんでした。私が足利出身だったため、足利も候補地に行っていました。そんな時、足カフェ@東京vol.2（2016年9月22日）に参加したことをきっかけに、私たちの想いが少しずつ動き出すことになりました。

足カフェでは、足利には多くの空き家があること、その一方でその空き家の利活用を促進、後押ししている人がいることを知りました。開業場所がなかなか見つからなかったのも、足利の古民家で喫茶店をはじめてみるのも悪くないと思



「巨大まちなか回遊MAP」をたかうじ君広場前に設置。
「足利よりみちプロジェクト」代表の梁川氏（中央）と
デザイナーの鶴見氏（右）

があつて良いかなと思いました。例えば、ある人の好きな風景がみられるマップとか、ある人が好きな店のマップとか。地域の人それぞれに好きな場所、スポットや店などがあつて、それをマッピングして貰えばいいというものです。これはすぐくデイープな地図になります。これはまだまだあまり注目されていなかったレアなお店を繋ぐこともできるようになりました。この企画はワークショップという形で地域の方々をお呼びして実施しました。大学生や高校生、地域のお年寄りなどにも集まってもらいました。足利大学の渡邊先生のご協力もあつて、たかうじくん広場の向かいの住宅の塀に巨大なよりみちマップも設置することもできました。

活動の魅力
私は人と接することがとても好きなので、イベントをやってみることに楽しんでもらったり、地図をつくってみなさんとこれまで知らなかったことを共有したりすることがすごく楽しいです。イベントで得られる達成感が日々の活力だったり、新たな企画への出発点となっています。

進行中ですが、他の企画はまた今後の機会に紹介できたらと思います。

た。これはたくさんの方の書き込みがあつて、意外と反響が大きいです。観光でいらした方々もあれを目にして足を運んだという場所が多くあるようです。
KITANAKA 100%は地域新聞で、北仲通りの近隣にある店舗とその店主に焦点を当てて魅力を紹介するというものです。これも2019年から20年頃に隔月15日発行でやっていました。北仲には魅力的なお店がたくさんありますから、私たちはそんなお店と店主さんを知ってもらいたいと思えました。近年、店主のみなさんの高齢化もあつて、SNSなどには対応しきれませんから、その代わりになるようなツールを目指しました。
ほかにも細かい企画は実はたくさんあります（笑）。町中華マップというものも進行中ですが、他の企画はまた今後の機会に紹介できたらと思います。

幅広い連携を目指して
現在は足利ミッドタウン商店会のみなさんとの連携が多いです。鶴見さんも足利ミッドタウン商店会のメンバーの一人です。
現在、桐生や佐野、古河の方まで、まちづくりをやっている人たちとの交流が進んでいます。この両毛エリア一帯でいろんな人たちとどんどん連携していきたいらと思つています。この前は佐野で活動されている「ぱっと二条プロジェクト」の方々や意見交換をし、今後何か一緒にできたならと模索中です。足利ミッドタウン商店会はほとんどが店主の集まりなので、開業をアドバイスしたり、一緒に事業をできるかもしれません。

他の世代に臨むこと
若い人たちには足利でのお祭りやイベントに積極的に参加してほしいです。若い人たちとともに何かできればと考えています。また、普段接しないお年寄りとも交流することで、若い人とお年寄り、そして私たちみんなが楽しい場所がつかれるような気がするんです。ぜひ、若い世代のとのつながりをもっとつくりたいと思います。



ほろにがウォーク (HNW) のマップ



よりみちマップ作成ワークショップの様子



みんなそれぞれの、よりみちマップ



よりみちマップの一例

した。松陰神社周辺はまちづくりが盛んで、まちづくりをやっている人たちと意見交換することもできました。これに発されて、自分たちの足利でも何かできないかと考えるようになり、これがきっかけになって、足利ミッドタウン商店会の発足やキタナカモールへと発展してきました。

キタナカモールとは、区画整理が進み変化していく趣のある北仲通り界隈の現状を、イベントを通して人々の記憶に刻んでもらおうという思いから生まれたイベントです。

2023年5月5日に開催予定のキタナカモールは「子ども」をテーマにし、彼らの学びの場としても機能するようなイベントにしています。長くこの北仲エリアに住んでいらつしやる地元のお年寄

りとの交流もできて、子どもたちにとつても、おじいちゃん、おばあちゃんにとつても楽しい時間を提供できているのではないかと思つています。また、今年は秋にも予定されています。

マップづくりよりみち&ほろにが

北仲商店会のみならずあつているもの他にも、私と地元のデザイナーでスペアミント代表の鶴見さんとで実施した企画もあります。それが、「よりみちマップ」と「ほろにがウォーク」、そして「KITANAKA 100%」です。

私自身が喫茶店をしていますので、他の喫茶店の方々ともつながりたいと思つましたし、地域の人や観光客に喫茶店の情報を共有したいとも考え、ほろにがウォークという語呂を提案しました。足

利で50年近く前から営業されている喫茶店モカの堀越さんに相談にきました。思いの丈を話すと堀越さんが賛同してくださり、この企画をスタートさせることができました。それから、私自身が1店1店、喫茶店を回つてほろにがウォークへの参加をお願いしました。実は足利には伊勢町から織姫神社の辺りまでの間で30件近く喫茶店がある喫茶激戦エリアです。それぞれのお店の個性が異なつていて、それを共有することができれば、地域の人にとつても、そして私にとつても楽しい経験ができると思つきました。

次に、よりみちマップは2019年から21年頃まで続けていました。いまは、コロナ禍でその作業ができていません。それまでまち歩きマップがなかったわけではありませんが、もつと偏つたマップ



奈落 NARAKU <https://bg-art.work/works/>



最新作 踊る探偵



撮影中



足利第一中学校での講演会



上毛新聞 2021年9月28日号掲載

活動の中で苦労した点はなんですか？
 やはり高校生でお金がないため、機材や小道具、衣装にとっても苦労しました。機材はiPhoneを使用し、照明は懐中電灯を使用しました。それらの機材をどれだけ工夫し、活かせるかが大事になってくると思ったので最大限その機材を活かしました。

活動して一番嬉しかったことは？
 「綾部光真の正しい大人になる方法」が、やっぱり国際ファンタスティック映画

祭「やっぱりホープ」という賞をいただいた時です。最初はとても驚き、信じられませんでした。徐々にも実感が湧いてきました。今後の自信にも繋がりました。

皆さんが感じている、足利の魅力を教えてください
 雰囲気の良い道や建物が多く残っている点、自然豊かで文化・芸術に力を入れている点です。

現在活動中ということですが、今後、新たに交流してみたい足利の人物（専門分野、職種、世代）がいたら教えてください。自分達より下の世代にも映画の良さや、夢を実現することができるということを直



Bad Guys ART work
ロゴマーク

関連サイト

web : bg-art.work

YouTube : [@badguysartwork1336](https://www.youtube.com/@badguysartwork1336)

Instagram : [@badguysartwork](https://www.instagram.com/@badguysartwork)

Twitter : [@Badguys_artwork](https://twitter.com/@Badguys_artwork)

話し手
Bad Guys ART work

聞き手
渡邊美樹

インタビュー日時：
令和4年12月13日

「綾部光真の正しい大人になる方法」



足利市民プラザでの上映会終了後

Bad Guys ART work 足利を舞台とした高校生による映画

活動内容とそのきっかけ

中学3年生の頃から体育祭で踊るダンスの振り付けを考えたり、身内ネタの動画を作ったりして様々な活動を行っていました。そして高校1年生の冬にSSFF & ASIAというコンペを見つけ、出品することになりました。そこから本格的に映画制作を始めました。

まちあるき掲示板に書き込んで下さったのが、活動を知るきっかけとなりました。他にどのように広報していますか？

WebサイトやSNS、記者クラブへ記事の投げ込み、足利市内の飲食店にチラシを置かせてもらうなどして広報を行っています。

メンバーと活動内容を教えてください
板橋謙佑(イタバシケンスケ) : 脚本・監督、そしてBad Guys ART workのリーダーを務めています。

山本賢太郎(ヤマモトケンタロウ) : フライヤーのデザイン等を行うアートディレクターと撮影を担当しています。

木村颯汰(キムラソウタ) : 撮影場所の交渉や企画等を行うプロデューサーを担当しています。

松島嵩(マツシマシユウ) : 助監督として制作の進行、現場の指示を行っています。

接教えたいと考えています。

また、中学生や足利市長とこの足利市をどのように活性化させていくかを話したいです。

「多世代交流による足利のまちづくり」企画・編集委員会

大野隆司
足利大学工学部准教授

北村 隆
元 足利大学附属高等学校長、足利大学総合研究センター 研究員

福島二郎
足利大学非常勤講師

渡邊美樹
足利大学工学部教授

協力者（団体）

秋草俊二
秋山 佳奈子
あしもり隊
岩本秀雄
清水（和木）佐恵子
鈴木光尚
成澤布美子
梁川健人
Bad Guys ART work

（敬称略・五十音順）

多世代交流による足利のまちづくり | 02

発行日 2023年5月1日
編著・制作・刊行 「多世代交流による足利のまちづくり」企画・編集委員会
編集 大野隆司 北村隆 福島二郎 渡邊美樹
印刷・製本 上武印刷株式会社

問合せ
足利大学
〒326-8558 栃木県足利市大前町 268-1
TEL 0284-62-0605

無断転載禁止

©「多世代交流による足利のまちづくり」企画・編集委員会



おわりに

渡邊美樹

藤が花開く季節となりました。藤といえばあしかがフラワーパークが有名ですが、我が足利大学にも、学生食堂棟の前にひっそりと藤棚があります。そして、「多世代交流による足利のまちづくり」の第2号をお届けできてとても嬉しく思います。まずは、第2号の取材や寄稿に心より敬意を表します。

また、第2号の「はじめに」をお寄せくださった末武学長はじめ、取材と編集を担当された先生方へ、それから創刊のきっかけを創られた牛山前理事長へ改めて感謝申し上げます。「この人に聞く」の「トチセン」は、東武電車の車窓から見える煉瓦造のこぎり屋根工場で、福居駅前のシンボルとして歴史的景観を維持されながら、数々の映画の舞台となつています。「大久保分校スタートアップミュージアム」、「足利の近代化遺産を考える会」、「ジョイDO（表現教育の市民団体）」や「ジモトの木プロジェクト」さんらは、足利の地域資源をさまざまな形で積極的に活用する取り組みであり、「足利市民活

動センター」はそうした市民の社会貢献を長年支えてこられたのだと思います。高校生が主催する「あしもり隊」、「Bad Guys ART work」は、高校生らが街へ飛び出して足利の魅力を発掘し、「八蔵」さんは旧市街地の中心に飛び込んで地元にも観光客にも親しまれるカフェを経営しながら地域の店舗とのネットワークを築き上げ、それぞれの表現でロゴマークやイベントや映像として情報発信するとう、大変頼もしい方々であり足利の未来へ多くの示唆と希望を与えてくれます。この冊子を通じて、まちづくりに取り組む人々がより効果的に活動を広げ、交流し、豊かで活気あるコミュニティの実現につながることを願っています。

令和5年4月吉日
足利大学 教授 渡邊美樹